

跋

三島君が、日本民族の人種的系統を神社の方面より討ねんとする研究に關し、始めて予の事務所を訪はれたるは過る大正十二年の春なりき。この研究は新らしき研究方法の一方面として予の豫て提唱したる所に係り、既に大正七年十一月バビロン學會の第三談話會に於てシメール系に屬するバビロニアの日の神ウト、海の神ヤー等が廣く我國に崇拜される事蹟を指摘し、會員の注意を促がしてより以來、機會ある毎に予は其の意見を公表せり。然れども予が專攻の學科は異なる部門に在りて、是等の問題に深入りすべき餘力なく、加ふるに予は我國の古典に暗くして神社の調査に多大の困難あり、孰れにしても奴鴈となりて學界を警告するは格別、研究の遂行に就ては予自身に於て其任に堪えず。あはれ何人にも有れ、適當なる學者の出で、之れを大成するものあれかしと切望し居

たる折柄宿願空しからずして圖らずも篤學なる三島君に逢ひ、一夕縦談放語の樂得て忘るべからざるものありしなり。爾來信書によりて屢々君の質問に應へ、敢て不學を顧みずして未熟の見を披瀝し來れる内、最近一裘葛杳として君が消息の絶えたるを異しみたりしに、頃日突然その來訪を受け、尨大なる數百頁の原稿を示さるるに及び、さしも前人未到の荒野、君が數年の努力によりて一大美田と化したるを知り、拍手以て君のため祝すると同時に、我學會近來の快事としてまた國民の爲に祝せり。

バビロン學の門に入りて資料の攻究に従事すれば、何人と雖もバビロニアと我國との間に明白なる合致の存するを氣附かずして在り得ることは難し。所謂合致は一般性を有し、何れの方面にも其現象を認め得べしと雖も、就中言語學の領域に於て最も著しく、自然の印象として、バビロニア語こそ日本民族固有の言語なるにあらざるかを疑はしむ。予は管に我國普通の口語が名詞にもあれ、動詞にもあれ、將た代名詞にもあれ、接續詞にもあれ、南北バビロニア語の孰れかに於て明確なる對語を看出し得るもの多く、時としては音調口調の末に至るまで彼此互に合致せる場合ありとの事實のみを謂ふ

にあらず。また予は管に我國の神名、人名、姓氏名、部名、官名、職名、地名、地理的名稱、天象季節の名等が往々バビロニアの名稱と直接の傳統を示し、その然らざるものは、名稱そのもの、意義がバビロニア語に照らして始めて亮知され得るもの多しとの事實のみを謂ふにあらず。予は自ら驚き人をして愕かしむべき現象の一を取て爰に之れを指摘せんと欲す。开は我國語の内その構成が、概念付けられたる一定の子音を語根とし、ヴォカリゼーションによりて意義を確定すべき方法を探り、大體に於てセミット系バビロニア語の屈折法と同一の規則に従ふものあり、而も語根たる一定の子音は、我國語とバビロニア語とに於て精確に一致せる場合あり、且その成語が格(モード)を變化するに當り、我國語に於て取るところの前加音と、バビロニア語に於て取るところの前加音と全然同一なる場合ありとのこと即是れなり。

若し言語學上の論據によりて民族關係を斷定し得るものとすれば、アイザック、テトラの研究法に則り、まづ我國に存するバビロニア語の解剖的調査に従事し、シュメール系語とセミット系語とが我國語中に占むる所の各自の位置と、其地方的分布の状態とを定め、之れをバビロニア本土の史象に照らし、また我國の傳説に考へ、以てシュメール系バビロニア人とセミット系バビロニア人とが我國に渡來したる年代、各自の移住したる中心地點、其勢力の消長等を推定し得べきに似たり。予は未だ

曾て斯る調査を試みたることなきが故に、何等一定の意見を吐露すること能はずと雖も、多年の間に氣附きたる例證を綜合して略ぼ左の言をなすに憚らず。

一 地理的名稱に於て普通名詞をなし、古來廣く全國に使用せらるゝバビロニア語に就ていへば、シュメール系語多くしてセミット系語少く、またその固有名詞をなすものに就ていへば、シュメール系語が累積語(ヒープリダ、コンポジチオ)の一部を組成せる場合多きに反し、セミット系語が累積作用を受けたる例證は極めて稀なり。

二 日用の口語として古來全國に使用せらるゝバビロニア語に就ていへば、シュメール系語は野鄙語として使用せられ、セミット系語は都雅なる語として使用せらるゝ場合多し。

三 建國以後に至りて定められたるべく見ゆる官名、姓氏名等に就ていへば、多數のセミット系語を發見し得べきも、予は未だシュメール系語の痕蹟を認めたることなし。

以上寡少にして且不完全なる論材の上に立言すれば、シュメール系語の渡來はセミット系語よりも舊くして國語の最下層をなし、その社會的位置もまた卑きは明白なる所なり。若し言語の渡來が必ず民族と共にするものならば、シュメール系バビロニア人は先住民族を驅逐して最初に移住し、漸次繁殖して諸方に勢力を張り、其後に至りてセミット系バビロニア人の渡來を迎へ、相互の間に長き競争

ありたる末、後者が新進の勢力前者を凌駕して政治的優等階級となり、以て皇祖建國の偉業を輔翼し奉れりと謂ふことを得べし。年代に就ては、バビロニアの史象より推論して、シュメール系バビロニア人が團體としての移住は四千年前より遅きことを得ず、セミット系バビロニア人が團體としての移住は三千五百年前より早く、二千五百年前より遅きことの有り得べき理なし。是等兩民族移住の中心地點が何くに在りやを想像せんとするは稍々痴人の夢を説くに似たり。然れどもシュメール系語を以て成れる地名が伊勢附近に多く、セミット系の日用語が所謂上方言葉の中に最も多く發見せらるゝが如きは、我國の傳説に對照して一種の意義あるものゝ如し。

然れども考古學上の標語として、言語の類似は民族關係を立證せず。是れ一般理論の要求する所、多數實例の支持する所、牢乎として動かすべからざる一大原則なり。但だ我國語の場合に在りては、例外論を主張すべき幾多の根據なきにあらずと雖も、姑く消極論理を擱き、新たに言語以外の方面に進出して、均しくまた明確なる合致の存するものありや否やを探究せば、問題の解決に對して大なる光明を得ん。予が言語以外の方面に於て氣附きたる合致を摘記すれば左の如し。

一 神話傳説の合致

この點に就ては雜誌バビロン第二號にその梗概を掲げ、國學院雜誌上には更に之れを詳述した

り。爰に其要領をいへば、バビロニアの著名なる神話傳説、就中ギルガメシ史詩、マルドク大神の創世神話、イシタル女神が地獄降りの神話等は原形のまま、若しくは分解、改造の作用を受けて悉く我古典中に發見せらる。バビロニアに存したる新舊二様の三神一致(トリアド)は、全然同一の組織を以て共に我古典に存す。

二 宗教の合致

アニミズム的多神教より出發して自然教的三神一致の信仰に到着し、更に一步を進めて一神教的傾向を帯ぶるに至りし點に於て、我古神道は明かにバビロン教の傳統を示す。神の概念がイストラエルの抽象觀と希臘の寫實觀との中間に位し、倫理的に洗練されたる人生觀を以て信仰の目的となす點に於て、バビロニア民族と日本民族とは正しく其宗教思想を一にし、祭る所のおもなる神々に至りては彼此正確に合致す。

三 相貌の合致

この點に就ては雜誌バビロン第三號に其詳細を盡くせり。爰にその要領をいへば、シュメール系バビロニア人特有の相貌とセミット系バビロニア人特有の相貌とが、兩々相并んで我國古來の繪畫彫刻に描き出さるゝのみならず、現時に於ても全國到る處に活ける標本を發見す。而も

型式の純粹にしてバビロニアの古き彫像の躍り出でたらんが如き例證は予の常に遭遇する所なり。是等相貌の地方的分布に就て詳細の調査を施さば、シュメール系バビロニア人とセミット系バビロニア人とが移住の中心を推定し得るに庶幾し。

以上の外猶ほ風俗の合致として指摘し得べく思はるゝものあり。固より予は我國上古の風俗に就て何等正確の資料を有するものにあらず。然れども古事記の文に現はるゝ伊邪那伎命の服裝が上古の君主に擬したるものと假定せば第三王朝(紀元前千八百年乃至千二百年)以後に於けるバビロン君主の服裝に合致するが如し。また同じ文に現はるゝ天照大神の武裝は軍の女神イシタルの武裝と正確に合致す。若し是れを以て我國上古の武將を描くものと假定せば、アッシリア時代に於けるバビロン軍將の武裝を聯想せしむ。須佐之男命が父神の命を奉せずして國土を追はるゝに至りし神話を以て、不孝の罪に對する上古の慣習法に反射するものと假定せば、正確にシュメール家族法の規定と合致す。是等疑はしきものを列舉せんとすれば幾んど際限なく、婚姻の制度、建築の方式等より紋章記號の末に及ぼすことを得べし。

合致の現象が唯り一方面に於てのみ存し、または一時代に於てのみ觀らるゝ場合に在りては、その原因を暗合、摸倣、輸入等に歸すべき餘地あり。然れども多數の方面に亘りて一様に之れを認め得べ

く、而も數千年を通じて存續する場合に在りては、中心に於て實存する本體の光輝が周邊に向つて放射作用を生ずるものに外ならずして、偶然突發の緣由に之れを歸すること能はず。果して然らば放射の根元、現象の本體たるバビロニア民族その者が嘗て移住して我國に實在し、子孫繁殖して現に國土の經營に任ずるを斷定すべきは必然の論理なるに、世人は距離の遼遠なるにのみ重きを描きて、移住の壯舉の有り得べからざるを信ずるもの、如し。蓋し太古を知らざるの致す所なり。物資の極めて乏しき沖積層のバビロニアに國し、孜孜として四方に其物質を求めたるバビロニア人は、極めて古き時代に於て、遠く印度にチーク材を取り、支那にコバルトを獲たること、古跡の發掘が明かに立證したる所なり。彼等が極東に往來したる大道を尋ぬるに海陸兩路あり、海路は波斯灣を経て印度洋を航行するものにして、其陸岸に接し大なる海流あり、季節によりて方向を轉じ、春季は東流して出航を助け、秋季は西流して歸航に便す、而てシュメール系のバビロニア人は元來海邊の民なり。小舟を操りて海上に風の神と争ひ、大船を家として天災を波浪の上に避けたる等の神話に富み、頗る海上生活に慣れたるべく思はる、彼等に在りては、この海流を利用して春季船を極東に出し、印度、馬來に物資を求めて涼秋歸航するの業に従事したるもの尠からざりしを想像するに足る。陸路に就ては、現時に於ける中央亞細亞の地理的狀態を超越して太古を達觀することを要す。この高原は無數年來徐々に氣

候の變動を受け、熱と乾燥とによりて漸次に住所性を侵害せられ、終に交通至難なる現時の状態に立到りたるものにして、今より二千四百年前歴山王の時代に在りては、猶ほ大軍を率ゐて印度に往來するを妨げざりしなり。太古に在りては未だバビロニアの文化が其萌芽を發せざりしとき、この地は既に世界文明の一大中心にして、爾來歴史時代に至るまで、繁榮なる都市を諸方に存したること近時探檢の證明する所なり。故にバルチスタンの海岸道路も、アフガニスタンの中央道路も、將た裏海南東岸よりトルキスタンを經て天山路に通ずる北方道路も、共に太古以來引續き存在せる東西連絡の商業道路と思考せざるべからず。而てバビロニア人は歴史以前に早く東方に蔓延し、エラム一帯の地方、ザグロス山間所在の溪谷、悉く其範圍に歸しました早く東北方に進出し、アッシリア、アルメニアに植民して山地の民と交通を開けり。彼等の勢力、彼等の足跡何くにまで及びしや之れを確知するに由なしと雖も、既に坦々たる商業道路の存したる以上、彼等が年々送遣する所の隊商は、往々地方的交易を以て満足することなく、支那印度の特産物を尋ねて遠く東進するものありしを想像するに足る。陸上に將た海上に商業道路の開けたるは即ち移住の道路の開けたる所以にして、移住の動機の形蹟とはバビロニアの歴史に於て頗る乏しからざりし所なり。

富と勢力と榮譽との中心たるバビロニアの地は、四方諸民族の窺竄する所となりて、古來邊境常に

穩かならず。然れども眞に民族闘争の中央舞臺となりて、生民塗炭の苦を嘗むるに至れるは紀元前凡そ二千三百年を以て始めとす。この時アモリット民族バビロンを占領して北より殺倒し、エラム民族ラルサを侵略して東より壓迫し、イシン王朝之れが爲に倒れてシュメール系バビロニア民族の勢力頓に凋落し、爾來歴史的には其跡を絶てり。シュメール諸都市の王侯貴紳、難を遁れて何くに去りしや得て知るべからずと雖も、彼等が唯一の遁路は波斯灣に在りしこと、地理の關係上必然の事實なると同時に、他方に於て印度の文化を見れば、明かにシュメール分子の認め得らるるは頗る重要な論材なり。また紀元前千九百年小亞細亞のハッチ民族大擧してバビロニアを侵し、首都はその陥るゝ所となりてバビロンの第一王朝之れがために滅ぶ。ハッチ退いて、後東北山地のカツシ民族バビロニアを占領して第三王朝を經始し、セミット系バビロニア民族は一時草莽の間に閉息して其餘喘を保つのみ。當時第一王朝の王侯貴紳、難を北方に避けてアッシリアに留るものありたるは史蹟の存する所なれども、之れと同時にまた途を東方ザグロスに取りてイラン高原に遁れたるものあるは論を俟たず。第三王朝内に其勢力を確立し、外にエラムを經略するに及んで、彼等亡命者は益々深く東方に向て去らざるを得ざりしなり。紀元前千三百年アッシリア時代に入りてより、紀元前五百三十八年新バビロン帝國の倒壞したるまで、新なるセミット系の諸氏族屢々舞臺の上に現はれ、其都度バビロニアは修羅の

街となり、王朝の興亡幾んど走馬燈の觀あり。彼等の内、波斯灣頭沼澤の地を以て根據となすものあり。エラムを以て後援とするものあり。その失脚して退く所は明かなれども、アッシリアの第三帝國興りて四方を掃蕩するに及び、王侯貴紳のまた海路を取りて遁るゝものありしは論を俟たず。その陸路を遁るゝものは、アッシリア帝國の勢力範圍が中央亞細亞に向て擴張する毎に、愈々深く東方に去らざるを得ざりしと同時に、他方に於て支那の文化を見れば、明かにバビロニア分子の認め得らるゝは頗る重要な論材なり。

東海の瀛洲、東方の樂土等に關し、後世の思想に類するものが古きバビロニア人の間にも存しありや否やは予は之れを知らず。然れども日の神御尊崇の民にして東部亞細亞に移動すべく餘儀なくされたるものが、其安住の地を求めつゝ、日出處を目標として東方に厲進したるべきは自然の勢なり。予はバビロニアの亡命者が總て日の神の信徒なりしと謂ふにはあらず。唯だバビロニアの神々その名目は何にもあれ、實質上日の神と密接の關係に立たざるものなく、バビロニアの宗派その祭神は何にもあれ、根底に於て日の神を尊崇せざるものなしとのことを謂ふのみ。バビロンの日の神マルドクが一神教的發達を遂げ衆神は唯その權化となりたる後の時代に在りては言ふに及ばず、各都市各派の宗教を奉じたる時代にありても、諸神多くは日の神の變態たりしに過ぎず。然らざるものは日の神と提携

してのみ信徒の信仰を維持し得たるなり。エレクの大母神、生産繁殖の功德を以て名高かりし女神さへ、日の神を其兄としたりき。ウル王朝の守護神として長く威力の盛んなりし月の神さへ、日の神を其子としたりき。最古の時代に於て、神の性質が未だ分化作用を受けざりし當時に在りては、一面に於て他の神なれども一面に於ては日の神なるを例とす。エリドのエアを看よ魚形を有する海神なるは明かなれども、また朝な々々海より出て、陸に上りて文化を傳え、夕な々々海に向て歸り去る日の神ならずや。日の恩徳の尊崇が斯くまでに衷心を支配したるバビロニアの亡命者は、假令何神の信徒にてあれ、擧つて東方景慕の直感を有す。彼等は果てしなき亞細亞の大陸を行き盡して、海の彼方に絶東の島嶼を看出すとき、猶ほ之れに向て安住の理想を繋がんとはするなり。況や海上彼等を印度馬來に運びたる同じ海流は、日の神の嚴かなる招きによるかの如くに一路、豊秋津島の沿岸にまで輸送せざれば己まざるに於てをや。

以上は予がバビロン學講究中の副産物にして種々の缺點を含み、日本民族問題に對して何等斷定的意見を支持するものにあらずと雖も、一種の方法論として學界を警醒するに足るは予の疑はざる所なり。之が完成

に就ては固より多數學者の協力を要す。神話學者宗教學者言語學者、その他人文科學の各部門を専攻する學者が、各自擔當の方面より、我國とバビロニアを比較研究するの日に於て、日本民族問題は始めて最後の斷定を見んとす。而て是等學者の先鞭を著けたるものは實に我三島君なりとす。君夙に日本民族團結の機軸に著想し、其該博なる智識を以て仔細に其獨占場裡に檢按し、以て神社方面の極めて困難なる研究を遂げ、予の期待に對して最初の反響を與えられたるのみならず、其研究の結果、予の提唱が妄りに齊東野人の語を放ちて學界を騒がすものにあらざるを論證せられたり。是れ予の最も幸慶とする所にして、大に君の勞を感謝すると同時に、潜かに予自身の爲に祝せんと欲する所なり。

大正十五年十二月

バビロン學會の研究室に於て

原 田 敬 吾 記 す

正 誤

頁行
 一四ノ一 攝津其他ハ攝津等の地名、其他
 同ノ一三 折ハ拆
 一五ノ三 折ハ拆
 同ノ一四 Saituハ Saitu
 二二ノ七 事績ハ事蹟
 二五ノ八 (月)ハ(月、月の神)
 同上部 神教ハ神道
 七五ノ三 托ハ託
 九二ノ一三 延喜ハ延喜
 九四ノ上 語言ハ語原
 九六ノ八 するものがハするも
 一一三ノ八 書記ハ書紀
 一二九ノ八 一宮紀ハ一宮記
 一三六ノ九 書記ハ書紀
 一五三ノ二 宿彌ハ宿彌
 一五五ノ一 帥船ハ帥船
 一六四ノ一〇 大宇ハ大字
 一六八ノ一〇 神社とハ神社を
 一八六ノ一一 折ハ拆
 一九七ノ七 の力ハの權力
 二〇九ノ一〇 雜事ハ雜事記
 二一一ノ三 天照神ハ天照大神

頁行
 二一八ノ一〇 折ハ拆
 二一九ノ二 大名命ハ大名草命
 同ノ四 津守速ハ津守連
 二二二ノ一〇 るハにりハるハに至り
 二三八ノ一三 住吉卿ハ住吉郷
 二四四ノ六 魚であがハ魚であるが
 二四七ノ九 石折ハ石拆
 二五六ノ一 舊事記ハ舊事紀
 二六一ノ一四 單に尊稱したるにハ單に各尊稱たるに
 二八六ノ六 金折ハ金拆
 同 其の神ハ其の子
 三〇四ノ三 永解ハ水解
 三〇九ノ一 各社名ハ各舉社名
 三一〇ノ七 書記ハ書紀
 三一二ノ九 件鏡ハ件御鏡
 同 托ハ託
 三一四ノ一三 和泉天神ハ和泉國天神
 三六三ノ一四 物連ハ物部連
 四〇四ノ一二 談路ハ淡路
 四一〇ノ一四 字像ハ宗像
 四五九ノ一三 變化ネボハ變化ノボ

昭和二年十二月二十日印刷
 昭和二年十二月廿五日發行
 昭和三年三月三日再版

天孫人種六千年史の研究

定價金五圓五拾錢

著作
 所有

著 者 三 島 敦 雄

發 行 者 愛媛縣越智郡大三島宮浦村 三 島 澄 俊

印 刷 者 東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地 根 本 力 三

印 刷 所 東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地 株式會社 秀 英 舍

愛媛縣越智郡大三島

發 行 所

ス メ ル 學 會

振替東京五五九六三番